

言語教育と言語学習についての覚え書^(*)

小野原 信 善

はじめに

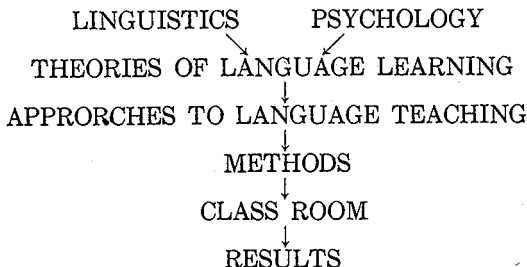
予てより語学教育に就いて少しく考える機会を欲しいと望んでいた処、幸いにも文部省と British Council の派遣で1978年7月より約3カ月間、英国エセックス大学での Summer School に参加する機会を得た。そこでは応用言語学を core lecture とする講義が行われ、初めて英語教育という問題に正面から接することが出来た。なにぶん、その領域には素人をもって任じる筆者ゆえ、只々感心するばかりではあったが、その中にも幾つか考えさせられる問題があった。小論では、それらの中の一つを取り上げ、日頃、「英語」という科目（一般教育）の中で、学生と接触するうち、曖昧なまま感得している語学教育感を織り交ぜ、言語教育について若干考えてみたい。通常、言語教育という名で示される語学教育は、大学でのそれではなく、中学・高等学校での level の問題と考えられる故、筆者の教室での体験は必ずしも言語教育を考える上で当を得たものではない、という反論もあろうかと思われるが、ここでは「言語教育」という名称の下での共通項、即ち“生身の人間に外国語を教える”という視点からは、猶も有用な要素と考えることにより論を進めることにしたい。

(I) 言語教育、並びに言語学習の問題点を論じるに当り、それらの現在までの概要を素描するのも一つの approach の仕方であるように思われる。一般に、言語教育の歴史は20数世紀にも遡ることが可能だといわれており、それを通時的に概観するのも、当然、「過去を研究し、現在を批判し、将来を計画する」⁽¹⁾という語学教育の理念とも合致するが、ここでは極く最近の方法を考察の対象に考えてみる。

現在行われている語学教育を眺める時、ビデオテープレコーダー等に代表

されるあまりにも多くの教育工学機器の普及に感心させられる。——即ち、language laboratory, Television, computer, computer score tests, 等々。これらの教育機器類が工学的革新の産物であることに異論を唱える者はいないであろうが、果たして、それらが如何程、言語教育、従って、言語学習、に貢献し得たであろうか。これについては、大いに疑々を訴える者が数多いことも見逃さないであろう。勿論、彼等とて、これら機器類の有効性を否定している訳ではない。問題は、それらが definite Vision の下に機能しているか否か、ということになる。即ち、科学技術の革新、工学的革新等と持て映やされる一方で、それらを駆使し得る独自の Methods を確立した者が、言語教育の内外で何人いたと言えようか。⁽²⁾ この事実を応用言語学者の責に帰すのは苛酷と言われるであろうか。彼等(応用言語学者)は empirical な研究を言語教育に contact させることに積極的ではなかったのではなからうか。換言すれば、これ迄の応用言語学者の作業は旧来の哲学者達が述べたことを教説化し、理論化することに精力を費し過ぎたと言っても過言ではない。とはいえ、彼等が、言語教育の上でなされてきた様々な発展を評価しようとしてきた努力も解るような気がする。然りとて、どういふ Method が他より優れているかということについての評価(判断)は、それほど簡単でないのも事実である。以下、何故それ程単純でないのかを説明することにより、言語教育の問題点をみる。

(II) 先ず、言語教育の方法論として考えられる次の図を眺めることにしよう。⁽³⁾



この図から明らかなのは上から下へ矢印が付けられていることである。

LINGUISTICS というのは当然 derivative disciplines を含む。即ち、理論言語学、社会言語学、歴史言語学等は当然のこと、その他種々の関連言語学が含まれる。一方、PSYCHOLOGY の名の下にその derivative discipline として、言語心理学が挙げられる。俶、LINGUISTICS が、その解明を目ざすものには、極く大雑把に言って次のようなものがある。

i) 言語の本質

ii) 言語のもつ諸特徴

又、PSYCHOLOGY が扱うものとして以下のものがある。

i) 学習過程

ii) 認知的且つ喚情的諸要因

(これらは人間の行動並びに学習に影響を与える)

このような性質を備えた disciplines が THEORIES OF LANGUAGE LEARNING を組織化する為に最近迄使われてきたと言えるし、現在でも数多く使われている。そして、これから、APPROACHES TO LANGUAGE TEACHING が導き出される。そこでは如何なる言語教育が組み立てられるべきかに就いて決断が下されることになる。従って、もし言語理論が行動主義に基づいたものであれば、言語教育法も当然その色彩を帯びたものになる。そうした或言語教育法を採ることにより言語教育に特定の指標となる METHODS が確立されることになる。言う迄もなく、こうした METHODS が実施されるのは CLASS ROOM に於てであり、そこでの構成員は、人間として可変的要素を備えた教師と生徒ということになる。従ってそこでの RESULTS は cognitive なものが期待されつつも、喚情的なものにもなる。

(Ⅲ) 以上、非常に簡単ではあるが上図を眺めてきた。次にこの図に於て見られる問題点を指摘し、併せて言語教育について少しばかり感想を述べることにしたい。

図で気づくことは、これが言語学及び心理学の理論展開によってなされているということである。つまり、一種の誘導法が適用されたと見て差支えない。問題はこの種の理論展開が果たして言語教育のそれと言い得るのであるかどうかという疑問である。そこには現場の教師や学習者から求められ、直接に示唆された見解が反映される余地はない。

つまり、それは言語教育及び学習の諸問題を具体的に実行する人達によって作り上げられたものではなく、言語学(と心理学)の理念に基づいて作成された一連の計画にすぎない。

他言すれば、言語の本質を問ひ、それを記述・説明しようとする姿勢、即ち、自然言語の獲得、知覚の strategy (に於る学習過程の問題)、言語獲得に影響を与える社会的・文化的 variable, といった様々な問題に対する関心から作成された計画に他ならない。そこには言語学者の立場が貫かれている。従って、現場の教師が、不平があるからといって、言語学者に向かって彼の研究を止めさせることも出来ないし、逆に、言語学者がそれを現場にあてはめるのも無理がある。しかし、このことは現場の教師が言語学者(並びに心理学者)の獲得した発明・発見を無視しても良いという事にはならない。否むしろ、そうした成果に注意を喚起する必要がある。即ち、現場の教師が言語教育に何らかの principles を打ち立てようと望むなら(事実、彼等の多くはそうすべく努力を払ってきている)、Pragmatism という美名の傘にかくれて、徒らに、現場での実践主義に満足してしまう⁽⁴⁾のではなく、寧ろ、そうした発明・発見に注目することは重要なことである。

ここで、応用言語学者の登場が期待されることになる。つまり、言語学習の理論とでも称すべき方法の提示が期待されるのである。そこでは、上図で示された THEORIES OF LANGUAGE LEARNING → APPROACHES TO LANGUAGE TEACHING といった方向ではなく、言語学習というのは言語教育によりもたらされる、という解釈を与えることにより両者の interface を画することが出来る。そして、そのことが上述の問題点を止揚する糸口になるかも知れない。

言語学習の理論の構築にあたっては、応用言語学者が、言語学や心理学で

獲得された知識を必要とするのは当然である。蓋しそれは次の如く理解されねばならない——言語学習及び教育の situation に関する、応用言語学者としての専門知識⁽⁵⁾の中にそれ(言語学や心理学で獲得された知識)が投入され消化されるべきである——と。結局、言語教育により生徒が言語学習に携わるように仕向けられる時、そこで何が生じるのか、何が生じるべきなのかについての、応用言語学者による理論的陳述こそが切望されるのである。

註

* 本稿の作成に当り Univ. of Essex での Applied Linguistics の講義を担当し、又、筆者の質問に気軽に答えてくれた Mr. Robert に感謝したい。

- (1) 大沢 茂 「英語教師はやっぱり専門職である」、『英語教育』1978 vol. XXVII No. 4 p. 6
- (2) これと並んで、筆者が常々不安を覚えることの一つに、これらの素晴らしい教材や機器を駆使し得る熟達した教師が、十分存在しているのか、という問題もある。
- (3) この図は Univ. of Essex での講義の際に使われたものである。
- (4) (Principle よりも)現場での実践を重視することに対する非難を躲す武器として Pragmatism という名が使われることがある。
- (5) ここで筆者の頭に描かれているのは、linguistics Applied と、Applied Linguistics の決定的違いである。前者は linguistics の他の分野への応用であり、後者は、それ自身個有の方法・理論を持つ別個の存在である。(1978.12.1)